



私の放送人生

第11回
元 RCC 中国放送
新井 俊一郎氏

民間放送が誕生
ラジオでも、テレビでも
その草創期を全力疾走した
ローカル民放奮闘記

私で良いのか

当欄執筆者の錚々たる顔ぶれを知って、正直なところ怖気を震った。私など、ただの地方局育ち無冠の太夫だ。

取り柄と言えば、敗戦直後に誕生したばかりの民間放送ラジオ局へ、これまた生まれただけの、新制大学から潜り込んだ、古代民放族の生き残り組だ。

その頭上に、「テレビもやれ」と天の声が降って来た次第。

無我夢中、民放ラジオとテレビ双方の草創期を生き抜いた開拓者としての御指名か。そう勝手に解釈して引き受けた。

占領下、ラジオが変わった

戦時中、ラジオは庶民の必需品だった。「空襲警報！」とラジオが叫んだら、即、防空壕へ逃げ込むためだ。片や「大本营発表！」と大戦果を報ずるラジオに、軍国少年の私は熱狂した。

ところが、負けない筈の日本が降伏。連合国軍に占領され、とたんにラジオが変わった。

『真相はかうだ』という、シヨックキングな番組が始まった。

「連日の大戦果発表は、みんなウソ。ホントは大本营が負け戦を隠していたのだ」という、米国製の暴露番組だった。驚きつつも眼から鱗だった。初めて、ラジオという怪物の威力を知った。



自画像「軍国少年」

ラジオ少年が一緒に

敗戦2年後の秋。新制高校1年になった私は、原子砂漠と化した広島市に復帰。バラック校舎で授業を再開した母校で、初めて「放送班」を創設。その初代班長に納まった。

ラジオ少年と化していた私は、教官室の片隅の放送室に、中高生たちだけで「生徒のための放送局」を開局した。

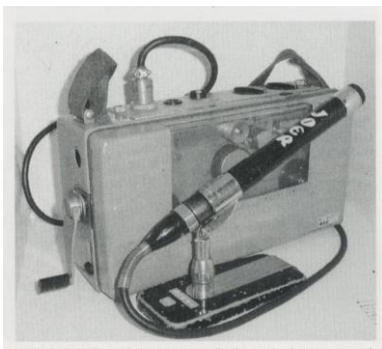
聞けば各地で似たような動き

が起こり、その連中が一斉に、生まれたばかりの民放ラジオに流れ込んだという。なんだ、そうか、オヤオヤであった。

民放の新生児

せっかく「広島放送」で創立しながら急遽、社名変更した「ラジオ中国」は、お解かりの通り、地元の中国新聞が親会社だ。

新聞社の3階を借りた本社事務室。片隅に仮設された8畳敷スタジオは、砂詰め木造の防音壁で囲われていたが、常に壁の中から、サラサラと砂が崩れる音が聞こえるお粗末さ。



開局当時使用されたゼンマイ式デンスケ(ソニー-EM1)

手回し式デンスケ

社員一期生の前職が凄い。県警本部の刑事。インパール

作戦で白骨街道生還の軍曹。海兵出身特攻隊の生き残り。シベリア出兵の古参兵、など。

開局翌年の昭和28年秋。自前の新社屋と大小5個のスタジオが完成。ようやく仮住まいを脱出したものの、私たち番組スタッフは多忙を極めた。

当初、有力スポンサー筋から「空気を売るような商売に付き合う気はない」と見捨てられた民放だが、市民からの絶賛と支援を得て、権力から自由で開かれたラジオとして、驚異的な急発展を遂げ始めていた。

劇団も楽団も合唱団も

私は、地元広島島の民放第1号「ラジオ中国」の二期生だ。

正式入社は昭和30年だが、その2年前から、学生の私はアマ放送劇団「あまがえる」の一員として、生まれたばかりのラジオ中国に潜り込んでいた。

信じられないだろうが、民放草創期は何と、放送劇Ⅱラジオドラマの最盛期だったのだ。

やがて、専属の放送劇団も、楽団も、合唱団も、効果団も誕生。かくてドラマ制作芸能部隊が揃ったが、演出担当となった私は我慢できず、勝手な行動を取り始めていた。



放送劇団と研究生



ラジオドラマ収録を終えて



大人に負けるな、子役たち頑張る

「新井幼稚園だ」と揶揄されながら育て上げたのが、大人を凌ぐ名演技の児童劇団と、ベーターベンをも演奏する子どもの大編成オーケストラだ。

その活躍ぶりは当時、NTVで映画化された話題となった。

若かったのだ。毎日お昼過ぎに15分枠の連続放送劇と、30分単発ドラマを両建てで放送、などという無茶をやった。

「戦闘状態二入レリ」だった。



KP2 録音機とテープ屑の山

録音・再生ヘッド

エコールームやエコー装置なんぞ無い貧乏地方局だが、知恵と工夫を凝らしたなあ。

楽器の鉄琴(グロッケン)を叩くと、チーンと涼やかな音色が響いて消える。この音に、電気的技法でエコーを付けた。

KP2という、可搬型2段重ねの録音機を使ったのだが、録音

機には普通、録音ヘッドと再生ヘッドが並んで付いている。その両者の間隔が重要だ。

まず、録音ヘッドから音を取り込むと同時に、その音を隣接する再生ヘッドから再生。その音をまた、隣接する録音ヘッドから取り込んで録音し再生するという操作を、ハウリングを警戒し、微妙な手加減で無限に繰り返す。のちに技師長を務めた同輩の技術者、田中通俊君とのコンビで完成させた。

エコーの魔術

私は、その完成した音響を逆回転させ、さらにエコーを付けた。つまり、音の前後にエコーを付けるといふ、普通では考えられないし、そんなこと有り得ない音の使い方を、この方式でやってのけたのだ。

かくて夢幻の世界が現れた。

昭和30年12月25日放送の、子ども向けクリスマス特集。寛浩二作、「星くずのキラメクところ」と題する、交通事故で生死の境を彷徨う少女の世界を描くファンタジーだった。

遙か彼方から音が尾を引きながら飛んで来て、ピュッと目の前を通過し、ヒューッと遙かな彼方へ消えて行き、消え残った星くずのなかから微かに、自分を呼ぶ声が聞こえて来る、というラストシーン。

翌年春の民放連主宰「民放祭番組コンクール」児童部門に提出したが、中国・四国地方予選優秀賞を獲得したものの、中央審査で落選した。

ダビングを重ねたことで、雑音が多かったのは事実だ。

児童合唱団の無伴奏合唱を、このエコー技術を使って収録し、昭和32年の「民放祭」では最優秀賞(金賞)を獲得した。

現在では標準的エコー装置の原理だ。少しばかり時代を先取りし過ぎた金賞だった。

授賞式に誰が出席したのか、私は知らない。

テレビだ!

ラジオスタジオ完備で自前の局舎が建ち、さあ行くか、と意気込んだ昭和34年2月。業務命令が下った。

「新井、

小畑和子の両名は、直ちにKRTラジオ東京に国内留学し、テレビ番組の制作技法を研修せよ。4月からテレビ開局だ。なお二人ともラジオ兼務とする」。妙な辞令だ。

お前は芝居経験があるから適任、ということらしい。

揃って吹っ飛んで行った。赤坂の「ラジオ東京」旧社屋だ。

二人とも、転んでも只では起きぬタイプ。局内に捨ててある台本やセット図、Qシート類の一切を、そっくり持ち帰った。

帰社した後、テレビ開局にあたり、これが一番、役に立った。

絵が見える

初期のNHKテレビも同じだったらしいが、ラジオに絵をつけろ、



ヤング小畑(奥)と新井



テレビ中継車・電源車1号

テレビ中継車と電源車

とばかり、ド素人集団は全国規模で騒動を起こした。映像用のスタジオが必要だが、そんな凄いもの作っている暇も金もない。だが開局時、テレビ電波

だけは発射せねばならない。急いで、高い山の上にテレビの送信所を造ろう。

原爆式典とカープの試合は必ず中継する。だからテレビ中継車は絶対必要。ならテレビ要員も大募集し、促成栽培だ。

これこそ正しく泥縄だが、「ヒロシマ地区民放テレビの第1号」。

その誇りこそが、私たちを突き動かす動機だった。社員数は大膨張し、350人！

すべて生放送！

昭和34年4月1日。「ラジオ



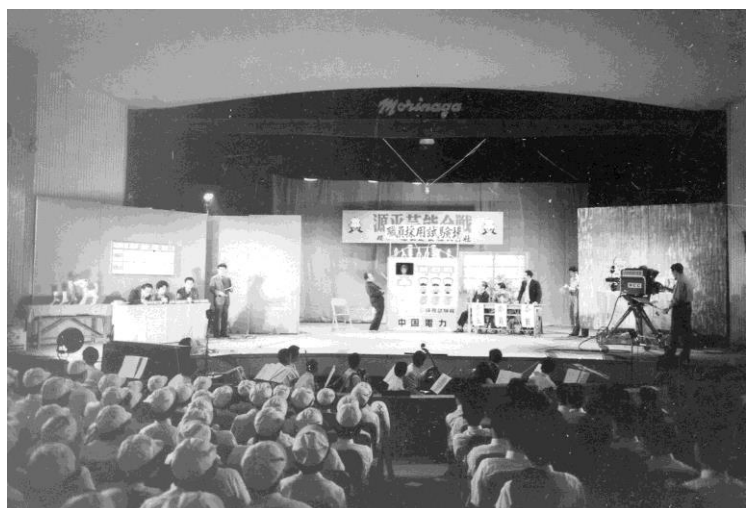
往時のインカムは

山頂の送信所が頼み
社屋を持たないテレビ局だ。完成したばかりの黄金山(おうごんざん)頂上の送信所に、テレビ局の心臓部たる番組送出マスター設備とアナブースを仮設した。
これで自前の番組は総て、山頂送信所の仮設マスターで加工して送出する態勢が整った。
番組には、テロップや16ミリフィルムを挿入せねばならない。

中国「テレビ」の開局日。
同月10日の皇太子殿下(当時)と同妃殿下のご成婚パレードが、一斉に開局した民放テレビで全国に中継放送された。
一方、その半月も前から私と小畑女史は、獅子奮迅の闘いの最中だった。スタジオもVTRもナシ。有るのは重量10トンの白黒テレビ中継車・電源車と制作技術陣ワンチームだけ。
開局前の3月。特別サービスと称して厚顔にも『カメラワーク実験放送』なる練習番組を、堂々と放送した。これが、名誉のテレビ第1号番組となった。

舞台から、全中ナマ放送
こんなとき「ステージ上で繰り広げる職域対抗の芸能合戦を、全国向けの30分枠で生中継して欲しい。年間数回だ」とのオフアーが入った。
『源平芸能合戦』だ。
初回は11月17日。
ヨシ、芸能ものなら舞台上が勝負だ。現場FDはオレが引き受ける、と名乗り出た。知らぬが仏、激烈な戦場であった。
出演者は職場代表の素人様。失礼ながら「時間ピッタリに終えてくれ」など、注文する方がムリ。だが何とかしろ。
演技指導を始めた。脚本も削

これを山頂の仮設マスターで、現場から届く中継電波に挿入して放送するのだが、テレビ制作課にその要員は居ない。
頭を下げ、テレビマスターに頼み込んだ。なんとか、MDという業務担当の3人目を確保。放送可能となり、ホッとした。



「源平芸能合戦」全国へ生中継

った。登退場のタイミングを指示した。セリフを削り、会話を縮め、出し物全体を指揮した。
司会者氏は、カメラハまで出てこない。だから私が司会者の代役を務めながら、時間内に納めるべく死闘を繰り広げた。
岩国海兵隊と某チームとの対戦では、西部劇を生で見ているような迫力で、満場大喝采！
いまなお不思議だ。どの中継も、ピタリ時間内に収まった。

ナイナイ尽くし生放送。徹底的に鍛えられた賜物だった。

カメラの魔術

『木島則夫モーニングショー』が初めて広島に乗り込んで来た昭和39年。「テーマは何か」とお尋ねがあった。「水です」と答えると、怪訝そうな表情。

「ご存じなかったらしい、あの日の被爆者の苦しみを。」
「ヨシ」とばかり私たちは、3台しかないカメラを必ず水の見える場所、5カ所に据えた。



被爆者インタビュー 木島則夫

インタビューする木島則夫氏

慰霊碑背後をカバーするカメラ1台をジープに乗せ、川面に映える原爆ドームが望める橋の上に移動させた。

所定のショットが終わるや否や、生きているカメラヘッドをケ

ーブルから外し、4人がかりで運び出した。事前にケーブルを伸ばしておいた相生橋の袂で、運んで来たカメラヘッドを、再びケーブルに繋いだ。

成功だった。

「貴局は一体、カメラを何台もっているのか」と問われ、密かにザマミロと呟いた。

画期的だった

テレビ中継車だけの2年半。オール生放送から脱したのは、昭和36年10月。

スタジオとVTR完備の新社屋完成と共に、作る番組が劇的に増えた。それまで、無理と断っていたのが一転、可能になったことで人員も増え始めた。

翌年4月、プール制予算方式を導入し、企画自由な30分枠、自社制作の定時番組をスタートさせた。『テレビホール』。

金も設備も人材も経験も劣る地方局だが、知恵と工夫の限



テレビ制作5人組

りを尽くした地方なりの作品を創り出そうと一致していた。
スタッフは、新人の女子社員を含め5人になっていた。

テレビドラマを

そして遂に同年7月3日、日下次郎作『ある町のある出来事』のタイトル。とある田舎町の選挙騒動を扱ったスタジオ制作30

分ドラマを、初めて世に送り出した。

8月4日。2作目の藤本義一の『地表』では、脚本依頼に私が同氏の大阪のご自宅まで押しかけ、ならばと、京都から名優の毛利菊枝さんを招き、地元からも劇団RCC総出演で創った。

9月25日、地元作家、多地映一の『さがす』も地元メンバーだけの出演、16ミリフィルム撮影シーン挿入で苦闘した作品だった。そして11月17日。ドラマ4作目にして東京地区で放送し、芸術祭にも参加したファンタジー・ドラマ『夢女』を創った。
みごと落選したが。



ファンタジー・ドラマ『夢女』

テレビの常識

翌年の昭和38年8月29日、『お母さん』シリーズで田中澄江『みかん』を作ると決まったときは、さすがに東京放送も気がなつたと見え、中堅の演出家が応援名目で吹っ飛んできた。

彼からは具体的に、瀬戸内の小島でのロケで指導を戴き、今でも有難く感謝している。



ドラマ『お母さん』のセットで

ということとは、それまで誰からもドラマ制作について正式な指導を受けたことがないまま、遂には、10本余のテレビドラマを創ったということだ。

実験だとばかり、テレビのタブーを幾つもブチ壊した。テレビカメラを下向けに吊るすな。ビデオテープを切り貼り

するな。危険だから中継車は海を渡すな。テープを逆回転させるな。常識に逆らうな。地方局にドラマは無理だ。

中継車渡しを自衛隊に依頼
上陸用舟艇で宮島に渡るテレビ中継車

みんな逆らって強行した。地方局だからこそ、できたのだと思っている。上司も気づかず、文句言う暇もなかったか。ラジオ番組に絵を付ける。

そんな姿勢だから、記録係もタイムキーパーも助監督も居ないまま、平気で映画を撮り始めた。それしかできなかった。専門家の皆さんは、苦笑するしかないだろうが、やってのけた。

「方向性」なんて用語も、後から知った。

今は昔・・・

『初めて物語』みたいになってしまったが、事実、地方局としては、ほかにやる者が居なかっただけのことだ。

「ラジオ中国テレビ」も最終的には、例のドリフのお化け番組もやってのけた。系列無視の西日本ローカル番組ワイサタ(『ワイドサタデー』)では、県域越え中継もやった。

これみな実力を備えたのではなく、火事場のバカ力だった、と私は思っている。

特筆すべきは、原爆で両親を亡くした小畑和子女史担当の「婦人ニュース」だろう。彼女らしい一貫した問題意識が、全国に「民放3和子」の存在を知らしめたと言える。

私も、中学1年生の原爆生き残りだ。社内被爆者は私たち二人だけだったのか、つまびらかでない。結果的に小畑、新井が中心で、永くヒロシマを証言し、訴え続けて来たということか。

時代は変わった。

デジタル時代とは、私たちアナログ放送人が追い求めつても得られなかった、夢の未来だ。生まれるのが、ちと、早すぎたらしい。

新井俊一郎略歴

(あらい・しゅんいちろう)

典型的な軍国少年宜しく、満州事変勃発の昭和6年秋、超未熟児として山形県で生まれたが、母の必死の愛情により極寒の里で奇跡的に生を得た。

のち父の転勤で大分、埼玉、広島と移り住み、被爆死すべき運命の中学1年生を、またも奇跡的に生き延び、今日に至る。

新製の広島大学を出て昭和30年3月、誕生したばかりのラジオ中国(現、中国放送)に入社し、主にラジオとテレビの制作畑を歴任したのち報道と経理を担当。やがて還暦を迎え定年退職した。